

集い支え合う場に

ひととき座って悩みや思いを語り、世間話に笑い合う。静かに本を読んだり、散歩途中に一服したりする人も。京都市北区の「まちの学び舎 ハルハウス」は、そんな誰に対しても扉を開き、人のつながりを生もうと作られた。「遠くの親せきより近くの他人」。代表の丹羽國子さん(72)の思いに共感した人たちが今日も集う。



早朝から雑炊を作るスタッフの牧田さんと丹羽さん、尾崎さん(右から)

北区・まちの学び舎 ハルハウス

手伝つのは佛教大2年尾崎久美さん(19)。「共同作業とか苦手で。就職活動で困らないよう半年前からボランティアを始めました」。週に何度か、早朝に顔を見せる。

太陽の目覚めも遅い冬の午前6時。のれんがかかり、ハルハウスの1日は「京雑炊の店」として始まる。調理担当は牧田一穂さん(23)。昨春採用された第1号スタッフだ。

学生時代に北区の山間部、小野郷のまちづくりに携わり、人のつながりを作る仕事をしたいと感じて、恩師である丹羽さんの誘いに応じた。「いろいろな人が来るので多くの知識を得られ、勉強できるのが喜び。朝4時半起床も慣れました」

午前7時前、この日最初の客は建設会社役員絹川雅則さん(52)。「上京区」だった。出された雑炊は10種の旬の野菜に豆類など彩り豊か。おいしそにはしでかきこんだ。

絹川さんは約10年前に丹羽さんと知り合った。福祉施設整備のため、当時丹羽

雑炊店、交流空間…扉はオープン

さんがハルハウスに先行して開設した「クニハウス」(名古屋市)を視察した時だ。

「心に病のある人やひきこもりの人がいて、元気のいい子どもが駆け回る。居心地のいい、この空間はなんだ?と驚きだった。お金は集まらないけど、人と物、情報は集まってくる。世の中には不思議な空間があるなあ、と」。昨春完工したハルハウスの建て替えを請け負い、日ごろはボランティアスタッフとしても関わ



「人がつながる場所」を研究する大学院生の小辻さん(左)と小林さん

食事を終えた絹川さんに「卵付き350円」と丹羽さん。値段表は450円引きたよ」。早起きは三文の得である。

午前9時35分、近くのお年寄りが焼酎を受け取りに来た。ハルハウスで作っているニンニク酒を自宅で作りたいという。足腰が弱い

午後1時すぎ、左半身の不自由な織田糸美さん(59)「久御山町」が病院のリハビリ帰りに歩いて訪れた。さらには佛教大の学生グループも。瞬間に会話があふれ、にぎやかになった。

午前10時。ここから午後4時まで地域住民の誰もが立ち寄れる交流スペース「まちの縁側」活動の時間だ。

1月中旬にあったハルハウスの新春交流会には、遠くは愛知県の人も含め13人が口コミでやってきた。

立命館大学院生の小林宗之さん(26)。「同区」が訪れた。研究の話などりとめなく丹羽さんと話す。30分後に現れたのは友人で同じ院生の小辻寿規さん

「統合失調症と病院で言われまして」「ブラジルで琴を教えました」「フィリピンのスラムの子供に歌を聴かせたりしてます」本当にいろいろな人が集まってくる。



出勤前に朝食をとりきた絹川さん

丹羽さんは言う。「人間は寄り集まって支え合って暮らしていかないと。そのために『まちの縁側』を増やしたい。私もハルハウスを、地域に未永く残すつもりです」(立川真悟)



1月中旬に開かれた新春交流会。丹羽さん(中央)が参加者に設立の



ハルハウス 2003年、佛教大教授だった丹羽國子さんが民家を買